

いまだコンセンサスがあるとはいえないということでしょうか。

**清水** そう、はっきりいってしまわれると困ります。

**湯浅** 一元化そのものに反対しているわけじゃないんです。理想としては非常にいいし、学生図書という狭い範囲でなくて、むしろ、研究図書館を中央にドンと造ってほしいことはまちがいないんです。

**西川** 私どもとしてはやっぱり将来的に文献検索ですね。情報サービスを主体とした図書館になっていくしかないと思います。だから、それへのステップとして、何をいまやるべきかを考えるべきで、図書を、共通図書と称して、どんどん増やしてゆくことには疑問があるんです。

**清水** いや、もちろんそうですが、それは、十分学生が勉強できるような体制が整ってからの問題じゃないか、と思うわけです。

**司会** 自分たちのお金ということでは、自分の研究に近いところの本を入門から全部そろえて並べちゃう。特に専門性の高いものは、これは図書館に出したって、どうせだれも使わないから自分で持っておこうということになる。だけど、一部でも図書館のものという意識になれば、入門的なものは学生も使うだろうから、図書館のほうに出しておこうとなるでしょう。要するに、意識改革が必要なんですよ。

**西川** そういう発想だとすると、研究用図書を大量に出すことになっただけの七〇%拠出という話をご破算にする

と、考えていいんですかね？

**辻** それしか、現実的にはないんじゃないんですかね。現状では学生用の充実が図書館の意向なんだろうが、面積計算との関係で七〇%という形で出すしかなかったんですよ。

**清水** いや、学生用図書館機能に限ると言い切っているわけではありません。今、不足しており、充足すべきが、学生用図書だということです。

**司会** 結局不信感の根本は、七〇%出したって、メリットは何もないじゃないかという点のようですね。ですから、少しずついい方に回転し始めると、随分みなさんの認識が変わってくるでしょうから、図書館としてはぜひ、そういう方向で、年毎に成果が見えるような形でご努力いただきたい。

そのためには、やはり、ここに問題があるというPR活動、情報の公開ということも、率先しておやりいただきたいと思えます。広大フォーラムのようなどころにどんどんPRをしていただくことも必要かと思えます。時間になりましたので、これでまとめたいと思えます。将来構想にまで深く立ち入ることができませんでしたが、またの機会を考えたいと思えます。本日は本当にお忙しいところをありがとうございました。



座談会を傍聴して

企画担当 ◆ 小田直樹  
広報委員

今年度の予算一元化をめぐる論争の背景には、三つの問題点が読みとれるように思われた。

第一は、それと七割供出原則との理念的な関係である。七割供出から想定される「一元化」は、研究書を含む全書籍の中央管理化（残りの三割も長期貸出に過ぎない）であったが、今回の予算執行では、学生用図書の選書がうつたえられた。実際は、七割供出は図書館で管理する書籍の大枠を確定するためのものに過ぎず、その内実を高める作業の最初に、とりあえず学生に重点をおくだけなのである。

第二は、その予算執行が理念通りに行われ得るかという点である。選書段階での部局依存が残れば、真の「一元化」は果たしえない。選書のプロを養成・配置するとかの購入システムの根本的改革が求められる。今回の措置は、図書館予算だということが選者の意識改革につながるという期待に基づくものであった。

第三は、長期計画で考えると、図書購入ばかりしていたら、理系の要望は満たされえないという点にある。さしあたり、図書館予算をとときには重点的に「情報化」に使えるようにすべきで

あろう。

図書館の将来を考えると、各館の性格づけをより徹底すべきであろう。

西図書館の学習図書館機能を徹底するのなら、教養的書物の配備に重点をおき、研究書は中央館へ配置替えを大胆に行つて、空きスペースには相当数の端末をそなえ、検索機器などに関する利用者教育、地域への開放にも使うべきであろう。

東図書館は、情報処理センターとの一体化も踏まえつつ、多数のデータベース・端末を備えたシステム図書館に作り換えていくことが考えられる。

もちろん、これらの改革が総合科学部や工学部・生物生産学部の不利益にならぬように、若干の閉架部分に利用価値のある研究書は残すべきであろう。しかし、常に所蔵書籍の質の維持・向上に向けて、見直しと配置替えが検討されるべきであろう。それでこそ、中央図書館も全学問分野の研究図書館となりうるであろう。

